

こんな授業はできないか

国語科で育てるべき生徒像は変わったのか

学習指導要領が改訂されるたびに、国語科の内容も変わってきています。また、理解偏重を是正するためか表現に力点がいったことがありました。国際的な学力調査により読解力低下が叫ばれると、再び理解重視へとシフトしました。

事あるたびに振り子の針が振り切れる傾向がありますが、大切なことは表現と理解のバランスでしょう。どちらも重要であり、必要なことです。とどのつまり、国語科で育てるべき生徒像は、そんなに変わってはいません。重視すべき点や見方や考え方に変化があるだけです。

生徒一人一人の考えを生かす授業をつくるために

(1) 今までの授業を振り返ってみると

- 一問一答式の発問になっていた。
- 多様な考えが望めないような発問や学習課題だった。
- 読めばわかる、書いてあることをそのまま問うような発問だった。
- 生徒は教師の望む言葉を考え、答えようとしていた。
- 生徒に主体的に学ぼうとする意欲が見られなかった。
- 生徒に自分の意見や考えを積極的に話そうとする姿が見られなかった。
- 他の意見が聞きたいという心情の高まりが見られなかった。

(2) これからの課題

① 指導時数に対して

国語科の指導時数が削減されてから久しくなります。一つの教材に多くの時数をかけて読むということができなくなりました。教材を通してどのような資質・能力をつけていかなければならないのでしょうか。各領域や学年など、互いに関連を図った多様な学習活動をどう展開していけばよいのでしょうか。

② 必然性と必要性を感じるように

例えば、話す力をつけさせるためには、話す活動を多く取り入れなければなりません。しかし、ただ話すこと・聞くことの活動をさせれば、話す力や聞く力が身につくわけではありません。生徒が、必然性と必要性を感じ、意欲的に取り組む活動でなければ力は身につけません。

また、読むことに関しても、何が書いてあるのか、この作品のテーマは何か、などの答えを探し求めるような学習活動ではなく、生徒一人一人が、自分はどう考えるのか、生徒自身の読みが問われるような学習活動を展開していく必要があります。

(3) 説明的文章の学習を軸に据える

学校教育の中で国語科が果たす中核の役割は、第一に現象や情報を言葉によって正確に理解・判断し、目的や相手・場面に応じて的確に表現する方法、その基本と個性化への学習方法や自己評価能力を指導することです。これは、論理的な思考力と表現力の指導ということでもあります。

そのための方法・教材は、いろいろ考えられますが、説明文教材の学習を一つの軸に据えることで、情報理解の方法のモデル、情報の収集・判断・構成・表現方法のモデルを基礎・基本から個性的な方法や応用の形まで学ぶことが可能になります。説明文教材は扱い方によって、優れた個性的な情報理解の1モデルとなり、同時に表現技術の面からも優れた情報発信の1モデルとしてとらえることができるからです。

(4) 目指す方向性

- 要点・要旨をとらえることに終始せず、生徒の興味・関心を大切に、驚きや感動を引き出しながら読み進めるようにします。
- 言葉や表現に基づいて、筆者の主張をしっかりと受け止めることにより、現代社会に起きている問題やこれからの人間や社会の望ましいあり方について考えを深める学習を通して、説明的文章を読むおもしろさを感じさせるようにします。